NO. 56
March '14
KIWIS newsletter
神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

『311：ここに生きる－IN THE MOMENT』上映会－我謝京子監督を迎えて

三　杉　圭　子

2013年10月16日台風一過の晴れやかな午後、我謝京子監督を本学にお迎えして女性学インスティチュート主催『311：ここに生きる－IN THE MOMENT』公開上映会がLAI-21教室で行われました。学生たちにまじって教職員やめぐみ会、学外からご参加下さった方々もお見受けしました。このドキュメンタリー映画は、東日本大震災の被災地に生きる人々のそれぞれの営みを描いています。ニュース映像には映らないひとりひとりの物語がそこにはあるのです。2011年秋に東京国際映画祭で公開されて以来、この作品は日本のみならず世界各国をめぐっています。登場する女性たちは大きな喪失を抱えながらも、生きるべき場を自ら見つけ出し、互いに手を差しのべあいながら日々を送っています。家を失い身を寄せあって小犬とともに暮らす二人、自ら被災しながらも避難所や仮設住宅でボランティア活動を続ける女性、亡くなった義理の娘に毎日語りかける母親、学校で津波に遭った少女、あるいは被災者に寄り添う教育者や復興支援の起業家――その姿やことばはこの震災の重みとともに、それでも前を向いて歩み続けることの貴さを伝えています。「国も社会もつくるのは女なんです。女が元気だったら大丈夫」と語る方の微笑みには、たくさんの悲しみを乗りこえようとする人間の強さがありました。

我謝京子氏はニューヨークでロイターの記者をするかたわらドキュメンタリー映画製作に取り組み、2009年に『母の道、娘の選択』を発表しておられます。私が監督とこの作品に出遭ったのは高校留学の派遣・受入を行うAFS（アメリカン・フィールド・サービス）という国際NPOを通してのご縁でした。私も我謝監督もかつてAFS生としてアメリカで高校の一年間を過ごし、帰国後AFS日本協会でボランティア活動に携わっていました。共通の友人に誘われた私は2012年９月大阪ドーンセンターで行われた上映会に足を運び、この作品に深い感銘を受けました。その後監督や友人からの働きかけがあり、女性学インスティチュートの米田真澄ディレクターのご尽力で今回のイベントが実現しました。ご体調が優れない中奔走下さった米田ディレクターにこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

日本各地での上映会のために一時帰国なさった我謝監督は、台風のために欠航が続いていた羽田空港からようやく飛び始めた最初の便で駆けつけて下さり、上映前に作品を通して自分自身と対話することを呼びかけて下さいました。多くの観衆が自ずと画面に引き込まれた後、壇上で監督と学生との対談の時間が持たれました。学生からは作品製作の動機やアメリカで働く女性としての生き方などにも質問が出、監督からは熱のこもったお応えとお話が続きました。

三杉圭子 教授

監督はこの作品の原点は1995年の阪神・淡路大震災だったとお話し下さいました。当時東京のテレビ局で記者をしておられた監督は神戸に何度も足を運んで取材を続け、街の復興と被災者のその後を見て来られました。この日の会場には、その時に知り合った少女の成長した姿もありました。その後我謝監督は移り住んだばかりのニューヨークで911同時多発テロ事件に遭遇し、ご自身が被災者となられました。その折周囲の女性のネットワークには随分と助けられたそうです。当時小さかったお嬢さんは今は大学生になって将来に向かって勉学に励んでおられます。そしてこの度の東日本大震災が起きました。監督はこれを撮るべきかどうか悩まれましたが、東北を訪れ、人々の話に耳を傾け、映画製作の決意を固められたそうです。

また、作品と対談を通して監督が学生たちに語って下さったのは、国や性別にかかわらず自分として在ること、そして自分の力で社会に貢献することでした。人魚姫をたとえにあげ、泡と消えてしまうのではなく、自分の意志で生きていくことが重要なのだとお話し下さいました。マイナスと思われることが起こっても、それをプラスに変えていく心を持つことで人間は輝けることを『311：ここに生きる』は伝えています。今ここの一瞬一瞬を大切にして、誰かに照らされるのではなく自分で光り輝く人になること、それが我謝監督からのメッセージでした。学生諸氏にとってはこのうえない励ましになったのではないでしょうか。

311以降、津波被害からの復興や放射能汚染問題など私たちが取り組まねばならない課題は山積しています。問題解決のための様々な取り組みと、その中でたゆまず前を向いて生きる多くの女性の営みに触れる学びの場を、今後も女性学インスティチュートが提供していければと思います。

（文学部教授：アメリカ文学・文化）

文系女子大生の就職活動の先にあるもの

横田恵子

2011年度から3年間、本学の社会調査士養成コースでは、「中堅女子大生の進路選択、自己効力感、そして卒業後の現実」をリサーチテーマとして学生たちに課しました。以下に、3年かけて学生たちが自ら明らかにした等身大の若い女性像を簡単にご紹介しましょう。

1．スキル（技能）ではなく決断力　文系中堅女子大生の場合、理系と異なり具体的な「売り」、すなわち誰にでもわかる技能や技術の習得証明はありません。理系女子の場合は、学んだ専門スキルが進路選好（就職希望業種）に直結しますが、文系の場合は何が出来るかなどと頓着せずに「まずは進路の方向性をスパッと決める」ことが自己効力感を高める結果となり、就職活動にアクティブになれるようなのです。

2．ロールモデルとしての母世代の生き方　1985年前後に生まれた中堅女子大卒業生たちの価値観の基本は、揺るぎなく「家庭人として子どもを養育し基本的には夫の働きを支える」というものでした。さまざまな女性たちの語りの奥に入り込むと、そこに見え隠れするのは母親世代の生きざま、近代家族システムのおおらかな肯定です。その結果、就職して数年たつ彼女たちは「次に開かれるであろう安定した結婚への扉」を予期し、それを前提に社会生活を送ることになります。

3．キャリアデザインではなくキャリアドリフト

2000年代以降の中堅女子大生とその卒業生たちは、あまたのキャリア教育を受けてきた世代です。キャリア教育では、「職業生活を展望して自分なりに設計図を描く」ことを勧められます。ところが現実には女性のキャリアがデザインできるようなものではないことは、当の若い女性たちはすでに予期しています。学生たちの調査結果から見えてきたのは「成功している中堅女子大学卒業生（文系）たちは、実はキャリアデザインをしておらず、人生の節目で即時に感覚的な決断をしているだけで、それ以外の時は流れて生きている」、すなわちキャリアドリフトというべき方策の採用効果でした。

このような特徴を呈する若い普通の文系女性たちに、私たちが示すことが出来る知とは何なのでしょう？柔軟に生き抜く力を身につけるために必要なことは、どうやら流行にのった資格や証明の取得ではなさそうです。また、結婚や家族についてラディカルな言説を示したところで、これもあまりお役には立てないようですね。さて、私たちはどのような女性をどこに送り出したいのでしょうか？

（文学部教授：社会学）

家族みんなでの夕食のための男女平等

高岡素子

2012年の春から1年間、私はスウェーデンのUppsala大学に留学させて頂きました。

専門の科学分野の研究において多大な知識を得ることができましたが、それ以外にスウェーデンで生活することで新たな気づきがありましたので少し報告させていただきます。

ある日、スウェーデン人の女子学生と一緒にアメリカンフットボールの試合を見ていた時のことです。ハーフタイムにチアガールが登場したとたん、突然彼女が怒り出したのです。「男子の応援をするくらいなら、彼女たちもアメリカンフットボールをやるべきだわ。スウェーデンにチアガールなんていらない」。

またある日のこと。大学の廊下で男性がドアを開けて待っていてくれました。私はお礼を言って通り過ぎようとしたところ、彼は言いました。「スウェーデン人の女性のためにドアを開けたりすると、ハラスメントだって怒られることがあるんだ」。

スウェーデンで強く感じたことは、スウェーデンの女性の「男女平等」という意識が非常に高いということです。そして男性たちも「男女平等」に協力的であり、「男女平等」の視点から家庭と仕事の両立を可能とする社会経済システムの構築が確立されているということです。

多くの父親は当然のこととして子育てに参加しており、乳母車を押したパパたちが決して珍しくありません。これはスウェーデンの育児休暇制度において、相手に譲渡できない期間が父母それぞれに60日間割り当てられており、父親が子育てに専念する期間が定められているからです。女性のみが仕事か子育てかという二者択一を迫られることはないため、女性の就労率にはライフサイクルによる差はほとんどみられず、仕事と家庭の両立が困難ではありません。

また、子育てと仕事の両立を可能とする基盤は、家庭生活を重視した労働環境にも見ることができます。スウェーデンの職場では、法定労働時間を超えて働くことをよしとせず、むしろ通常の勤務時間内で仕事を終えることを美徳とする風潮がみられ、夕食は家族そろって楽しむことが当たり前なのです。疲れてイライラすることなく、夫婦一緒に子育てをし、家族全員で夕食を囲むという幸せを、私たち日本人はすでに諦めているような気がします。最も大切なのは「人々の意識が変わること」。道のりは長そうです。

（人間科学部教授：食品科学）

2013年度 活動報告

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

5月	特別講演会 「女性の自立と幸せのために ～国際条約をもっと活用しましょう～」
	5／17（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者：ワーキング・ウイメンズ・ネットワーク（WWN） 代表 越堂静子 氏 参加者：140名
6月・7月	連続セミナー「性を売る女、買う男」(全４回／６月・７月開催)
	６／14（金） 14:00～15:30 JD-104 第１回 「聖書に登場する売春女性たち」 講 師：文学部総合文化学科 准教授 中野敬一 出席者：一般22名、学生１名 計23名
	６／21（金） 14:00～15:30 JD-104 第２回 「売買春の日本近現代史」 講 師：文学部総合文化学科 専任講師 河西秀哉 出席者：一般18名、学生２名 計20名
	６／28（金） 14:00～15:30 JD-104 第３回 「売春防止法と風俗営業法の共存」 講 師：文学部総合文化学科 教授 米田眞澄 出席者：一般17名、学生２名 計19名
	７／５（金） 14:00～15:30 JD-104 第４回 「戦後日本の性風俗と売春防止法」 講 師：文学部総合文化学科 専任講師 景山佳代子 出席者：一般19名、学生６名 計25名
	受講者数累計：一般21名、学生２名 計23名 修了証交付：21名
10月	公開上映会 ドキュメンタリー映画「311 ここに生きる－IN THE MOMENT－」
	10／16（水） 16:40～19:00 LAI-21 ゲスト：我謝京子 監督 出席者：110名

■学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」
	インターディシプリナリー・プログラム 修了証交付：1名
7月	第15回「女性学インスティチュート賞」 学生懸賞論文 ３編応募 最優秀賞：１編 三宮 愛（2013年３月人間科学部 心理・行動科学科卒） 「女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は精神的健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか －面接法と質問紙調査法による検討－」 優 秀 賞：１編 原田 薫（2013年３月文学部 総合文化学科卒） 「〈男装の少女〉のセクシュアリティ －少女マンガ世界におけるジェンダー表象－」 10／18（金） 表彰式 （記念賞授与式と同時）

■発行物

10月	newsletter №55 発行
3月	newsletter №56 発行
	『女性学評論』第28号 発行

<5/17 特別講演会>

<6/14 連続セミナー 第１回>

<6/21 連続セミナー 第２回>

<6/28 連続セミナー 第３回>

<7/5 連続セミナー 第４回>

<10/16 公開上映会(我謝京子監督)>

2014年度 スケジュール

■講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	**特別講演会 「女性差別撤廃、ジェンダー平等の実現という課題にめぐりあって ～私の物語～」** ＊申込不要 4／25（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者 ： 特定非営利活動法人グループみこし 理事長 米田禮子 氏
5月・6月	**連続セミナー「母と娘」(全4回／5・6月開催)** JD-104 ＊要申込
	第1回 5／23（金） 14:00～15:30 生野照子 名誉教授「摂食障害と母娘関係」
	第2回 5／30（金） 14:00～15:30 國吉知子 人間科学部 教授「母と娘～その光と闇～」
	第3回 6／6（金） 14:00～15:30 戸江哲理 文学部 専任講師「母たちと娘たちがいる風景：子育て支援の現場から」
	第4回 6／13（金） 14:00～15:30 高村峰生 文学部 専任講師「夜も更けた室内で、母娘の憎悪は燃え上がり ―イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』」
10月	**学外講演会は、2014年度は開催いたしません。**

＊都合により内容が上記から変更となる場合もあります。
講演会・セミナーの詳細は、決定次第ホームページなどで告知いたします。

■学生対象プログラム

年間	授業 ＊人数制限あり。登録時、要確認
	Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 （横田恵子教授、南條理恵子先生、野澤萌子先生） Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」 （渡部充准教授、井上紀子教授、林葉子先生） Cu133(1)「ジェンダー・スタディーズ（Ⅰ）」 （渡部充准教授、矢野円郁准教授、景山佳代子専任講師、谷口洋幸先生）
	インターディシプリナリー・プログラム
	【申込締切】〈前期〉2014年4月23日（水）16時必着 〈後期〉2014年10月15日（水）16時必着 ＊対象科目は、Universal Passportで確認してください。 ＊申請用紙は、女性学インスティチュートにあります。
	リベラルアーツ＆サイエンス・プログラム（副専攻：女性学）
	（2014年度以降の入学者対象） ・説 明 会：2014年7月（日時決定後（5月頃）教務課が掲示） ・受付・選考：2014年10月 ・履 修 時 期：2年生前期～4年生前期 ・アカデミック・アドバイザー：女性学インスティチュートディレクター
7月	学生懸賞論文 第16回 「女性学インスティチュート賞」
	【対象】在学中および2013年度卒業の本学学部生・大学院生が執筆した「女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文」 【締切】2014年7月9日（水）16時必着 【選考結果発表】2014年10月（予定） 【表彰】「最優秀賞」 1編（賞金5万円および賞状） 「優 秀 賞」 2編（賞金各2万円および賞状） 【論文発表】『女性学評論』第29号に、最優秀論文全文、優秀論文要旨、掲載予定。 ＊「募集要項」は、女性学インスティチュートもしくは下記URLよりご確認ください。 URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/act/program/program-essay/

■発行物

10月	newsletter №57 発行
3月	newsletter №58 発行
	『女性学評論』第29号 発行

○「連続セミナー」申込方法

つぎのいずれかの方法でお申込みください。

【往復はがき】
往信の文面に、
①「氏名（ふりがな）」
②「郵便番号」
③「住所」
④「電話番号」
を明記し、下記宛ご送付ください。
〒662-8505 西宮市岡田山4-1
神戸女学院大学
女性学インスティチュート
連続セミナー係

【メール】
件名に、
「連続セミナー（申込）」
本文に、
①「氏名（ふりがな）」
②「郵便番号」
③「住所」
④「電話番号」
⑤「メールアドレス」
を明記し、下記宛ご送信ください。
神戸女学院大学
女性学Inst.事務局
wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp
（ご利用のメールの設定によっては本学からのメールが迷惑メールフォルダに振り分けられることがあります。あらかじめ「mail.kobe-c.ac.jp」からのメールの受信を許可するよう設定してください。メール未着の場合は念のため迷惑メールフォルダもご確認ください。）

定員：50名（先着順）

締切：2014年5月9日(金)必着

＊本学学生は、直接、女性学インスティチュートに申し込んでください。

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティチュート
編集委員：三浦欽也、高村峰生、渡部 充、米田眞澄（委員長）
編集事務：東 綾、吉永真理子（ABC順）
〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL 0798-51-8545 FAX 0798-51-8527
URL http://www.kobe-c.ac.jp/gender/ e-mail : wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp